

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	合同シンポジウム(第76回東邦医学会総会) 座長のことば
別タイトル	76th Annual Meeting of the Medical Society of Toho University Joint Symposium
作成者(著者)	小林, 秀行
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.09.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(3). p.88 88.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	総説
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023 003
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD08075554

座長のことば

生殖医療 ～保険診療で何がか変わったか？

小林 秀行

東邦大学医学部泌尿器科学講座 准教授

2022年（令和4年）11月9日（水）に開催された当番教室企画のシンポジウムのテーマとして生殖医療を取り上げました。我が国における少子化問題は顕著であり、2021年の出生数は81万人であったにもかかわらず、2022年の出生数は、統計開始後初めて80万人を割り込むと予想されています。これは、以前からの少子化傾向に、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた結婚や妊娠の減少が拍車をかけたと考えられています。

少子化対策の1つの柱として、菅義偉前首相の主導で不妊治療は、2022年4月から保険適用の拡充が行なわれました。具体的には、これまで自費診療で行なわれていた人工授精、体外受精、顕微授精、男性の無精子症手術に対して保険適用となりました。

しかし、この保険適用までの過程はスムーズに事が進んだわけではありません。不妊治療の保険診療開始に間に合わせるために大変な苦勞があったのです。それは、6か月という短期間で保険診療化の学術的裏付けとなる「生殖医療ガイドライン」を作成する必要がありました。今回、座長を務めた筆者もガイドライン作成に関与しましたが、これまで自費診療で行なわれてきた不妊治療に対して、ゼロの状態からのガイドラインの完成は生殖医療に携わる産婦人科医および泌尿器科医が一致団結して行なった魂の成果

です。東邦大学医療センター大森病院リプロダクションセンターは長年にも渡り男女共に不妊治療に取り組んできました。患者数や治療面の上で他大学と比べてもトップクラスの不妊治療施設です。

今回、保険適用になって約6か月が過ぎた段階で、女性不妊症、男性不妊症、看護師からみた視点で、それぞれ3人の先生に、これまで自費診療で行なわれていた不妊治療から保険診療になり、実際に何が変化したかについて、それぞれの立場で講演をお願いしました。不妊治療の保険適用元年として、現場の意見を聞いたかったのです。

体外受精を含めた不妊治療の保険適用は、これまで高額で治療を諦めていた夫婦やカップルにとっては朗報です。少子化対策として、様々な取り組みがある中で不妊治療もその1つと考えています。東邦大学医療センター大森病院リプロダクションセンターはこれからも不妊治療に対して真摯に取り組み、少子化対策の一助になればと思っています。

ご講演を頂いた先生方、参加者の先生方、また進行をお手伝い頂いた東邦医学会の皆様にご感謝を申し上げます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2023-003